

昭和十二年二月八日印刷納本
昭和十二年二月十日發行
昭和十年十一月十一日 第三種郵便物認可
(毎十發行)

南風

第十二號

山崎俊英兄追悼號

目次

死生の問題	曾我量深
道限りなし	高光大船
遺稿	山崎俊英
俊英遂に逝く	山崎大水
山崎俊英君を悼む	金子大榮
一生を辿つて	北原繁磨
山崎兄の死に遇ひて	松原祐善
追憶	竹内良恵
編輯餘録

昭和十二年二月

死生の問題

逝ける友を追憶して

曾我量深

人間の理智は、生の方面に於てはその幾分かを解決し得るやうに見へ、それに關する諸種の學問や實行が成立し、着々として實現の進展を見るやうであるが、死の方面に對しては全く無知無能である。之れに依て我々は徒に此を恐怖厭惡し、反對に生のみを愛着し長養を祈願して止まぬのである。

人間の理智に關する限り、生と死とは全く方向を異にし、徒に生を愛し死を怖るゝは當然の事情である。併し乍ら文化の研究實行益々完成して、人々は反對にその希望が裏切られ、本來の明朗性が失はれ行くは、生の理智に映ずる所はその假像に過ぎずして、その本質が死と同じく人間の理智を超絶せるを暗示しないか。而して我々がそれを知らざるが爲めに却て死魔の妄想に強迫せらるゝでないか。我々は遠く生の從來する所、深く死の趣向する所を内觀すべきであらう。

我々は善惡の道德を人間的理智の獨斷に求めて、遂に底なき懷疑論に陥らざるを得なかつた。徒に知りて行ひ得ざるは獨我的理智に眞の信證なきが爲でないか。故に正しく善惡の業道は人間的理智を超へて本能の世界に存在すべきである。隨つて我々の死も生も悉くその決定は本能の裡に在るべきである。

誠に驕慢なる獨我的理智の前には、限りなき本能の世界は全く無明の暗に覆はれる。而してこの暗は法爾として本能に在るのではなく、是は全く理智妄情の主觀の作爲に外ならない。本能の世界は久遠の超日月光の淨國土である。それは常恒にそれに内在せる如來の本願の行力に依りて遍照せられつゝ、念々に衆生の獨我的理性の根本無明の暗を破ることに依つて、それ自らの國土を莊嚴象徴し、衆生を招喚攝取し、その歴史的表現として南無阿彌陀佛の名號を廻向し宣言せられたのである。

人間の理性には漠然ながらも生を自性善とし死を自性惡とし、淨土を生象徴とし地獄を死象徴と豫定して居るやうである。是は深き本能の和光同塵の暗示でなからうか。茲に如來の深き御方便があり、信心を開く宿善の契機があるのでなからうか。眞實に生の從來する所と、死の趣向する所とを證驗せしむる端緒でなからうか。眞に生と死と善と惡と、總て如來の知しめす所と信知する時、自然に生死一如の證相應するであらふ。

(一一一、一一一)